

令和 3 年 6 月 13 日現在

機関番号：25403

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12315

研究課題名（和文）トマス・ハーディの小説における賭博表象の倫理的な意義に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Ethical Significance of the Representation of Gambling in Thomas Hardy's Novels

研究代表者

原 雅樹（Hara, Masaki）

広島市立大学・国際学部・講師

研究者番号：30783500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究が明らかにしたのは、偶然に身を委ねるがゆえに不道德者としてしばしばみなされる賭博者が、トマス・ハーディの小説において、金融資本主義時代における新たな責任主体のモデルとして描かれているということだ。19世紀には、多くの人々が投資や投機といった金融行為を、偶然の遊戯である賭博と不可分のものとして捉えて危険視していた。金融資本主義社会は、いわば、偶然に支配された巨大な賭博場のようなものとして想像されていたのだ。こうした状況を見据えて、ハーディは、偶然の結果に責任を負う賭博者の主体というモデルを提案することをつうじて、金融資本主義時代に適した倫理学に取り組んでいたのだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果には以下の三つの意義がある。第一の意義は、自由意志による行為に責任を負う主体を描くことが小説という近代的文学形式の本質的特徴の一つであるとする、伝統的小説観の更新である。第二の意義は、20世紀後半に倫理学分野で提起された「道徳的運」の概念、すなわち道徳評価における偶然的要素の重要性を説く道徳観が、19世紀末英文学にも見出せることを明らかにすることで、責任主体をめぐる学際研究の可能性を示していることだ。第三の意義は、現代のわれわれが生きる、偶発事態と隣り合わせのグローバル金融資本主義社会においていかに責任主体を成立させうるのかという課題に対して、解答の手がかりを提示したことだ。

研究成果の概要（英文）：What this study reveals is that a gambler, who is usually regarded as an immoral person because of his/her surrender to chance, is depicted in Thomas Hardy's novel as a new model of responsible subject in the age of financial capitalism. In the nineteenth century, many people regarded financial activities such as investment and speculation as inseparable from risky gambling, dangerous game of chance. Financial capitalist society was imagined as a kind of giant gambling den ruled by chance. In response to this situation, Hardy tried to create an ethics suitable for the age of financial capitalism by proposing a model of the gambler-subject who takes responsibility for accidents.

研究分野：英文学

キーワード：トマス・ハーディ 賭博 偶然 主体 金融 倫理 近代 小説

1. 研究開始当初の背景

トマス・ハーディの多くの小説において、登場人物は偶然によって無慈悲にその人生を支配され悲劇的な結末を迎える。こうした特徴は、従来しばしば、チャールズ・ダーウィンの進化論との関連で論じられてきた。キリスト教的な創造説とは異なり、偶然に左右される非目的論的な世界観をその核とする進化論が、ハーディの小説の世界観の土台になっているというわけだ。近年では、そうした議論を前提として、ハーディが道徳的責任の問題をどのように捉えていたのかという問題が議論されている。近代のリベラリズムにおいて、通例、責任は自由意志と表裏一体のものとして捉えられる。責任は主体が自由意志により選択した行為に帰属するとされるのである。だが、もし人間を含む世界全体が偶然によって支配されているのだとすれば、ある行為を選択しようとするある人物の意志そのものが偶然の産物として捉えられることになってしまうため、近代的道徳主体モデルは通用しなくなってしまうわけだ。では、ハーディはこの問題にどのように対応しようとしたのか。従来の研究は、ハーディが道徳評価における偶然的要素の重要性を強調したことを指摘するにとどまっている。そこから前進して、ハーディが何か別の道徳主体モデルを積極的に提示しようとしている可能性に目を向けてみようとしたのが、本研究の始まりである。

2. 研究の目的

そのさい、本研究で注目したのは、ハーディがしばしば登場人物たちを、偶々生じた不運な出来事の結果にたんに苦しめられる弱者としてではなく、それを自ら引き受ける強さをもつ者として描いていること、そしてそんな彼ら彼女らを賭博者にたとえていることである。たしかにハーディの小説における賭博とその隠喩の中心性については、すでにいくつかの研究によって指摘されている。ハーディの小説においては、偶然の観念がカードやサイコロを使った賭博という具体的なかたちで描かれており、また、偶然に支配される登場人物たちの行為が賭博の隠喩によって表現されているのである。だが、先行研究では、こうした賭博表象が道徳的主体性を巡る問題と密接に関連しうることが見落とされてきた。ハーディは、偶然に支配された世界においてはリスクを計算し尽くすことが不可能であり、あらゆる行為が究極的にはある種の賭けにならざるをえないという事実を受け入れ、行為の結果に責任をとる登場人物を描きながら、そこに近代の自由な主体とは異なる、ポスト・ダーウィン時代にふさわしい道徳主体のオルタナティブを見出そうとしているのではないかと考えられるのだ。こうして、賭博者の主体と名づけられるだろうそうした代替的主体モデルを、ハーディの小説の読解を通じて浮かび上がらせることが、本研究の目的となった。

3. 研究の方法

この目的を達成するために、ハーディの詩や日記、創作メモ、書簡などに目配りをする一方で、主として彼の小説テキストを精読するという方法を採用した。分析対象とした小説は、『帰郷』(1878)、『熱のない人』(1881)、『キャスターブリッジの町長』(1886)、『森林地の人びと』(1887)、『ダーバヴィル家のテス』(1891)、そして『日陰者ジュード』(1895)である。いずれも賭博表象を含む作品であるが、それらのなかでとりわけ重視したのは『熱のない人』である。この小説はたしかに批評史においてハーディの全作品中もっともマイナーなものとして位置づけられてきた。けれども、賭博表象に注目する場合、実はこの小説ほど注目し値するものはない。というのは、作中では、賭博とその隠喩の描写が随所に見られるのはもちろんだが、何よりもストーリー全体が一つの大きな賭博として描かれているからである。プロットの核となるのは、自分の父親を裕福な娘と結婚させようという、ある賭博者の企てなのだ。その他の登場人物たちは我知らずこの大博打に巻き込まれ、それゆえにそれぞれ賭博者となってしまう、その最終結果を引き受けざるをえなくなるというわけだ。物語全体が賭博の隠喩からなるこの小説において登場人物たちがそれぞれどのように偶然の出来事に向き合うのかを分析することによって、ハーディにおける賭博と倫理の関連性が見えてくるはずである。

4. 研究成果

研究の結果、以上の目的が達成されたうえ、本研究を小説史研究というより広い分野のみならず、倫理学という隣接分野との関連性を見出すこともできた。偶然に身を委ねるがゆえに不道徳な者として通例みなされるはずの賭博者が、ハーディの小説においては、新たな責任主体のモデルとして描かれているということが明らかになった。種の進化における偶然の働きの重要性を主張したチャールズ・ダーウィン以後の時代を生きたハーディにとって、人間の生は偶然に左右されるものであり、その場合、18世紀以来小説という近代的文学形式が描いてきた、自由意志に基づく行為について責任を負う近代的道徳主体というモデルは通用しなくなってしまう。そこで、ハーディは、自由意志と責任とを両輪とするそうした道徳観のオルタナティブとして、自らの意志で選んだのではない偶然の結果に責任を負う道徳主体モデルを考案し、その具体的な姿を賭博者の中に見出したのだ。賭博者の道徳主体性と名づけられるだろうこうした概念は、従来の小説史研究が小説という文学形式のなかに見出してきた自由な主体性 (liberal

subjectivity) という概念とは異なっている。むしろそれは、20 世紀後半に倫理学分野の一部において「道徳的運」(moral luck) という新しい概念をつうじて提案された、偶然が避けえないことを踏まえて道徳評価を考えるべきであるという主張の先駆けとして位置づけられるだろう。しかしその一方で強調しておくべきは、ハーディの発想は、賭博者という一見不道徳な存在を新たな責任主体モデルの具体的形象として提示する点において、「道徳的運」とも微妙に異なっているということだ。ハーディの賭博者の責任主体は、小説史と倫理学史の両方の観点から注目に値するものだといえる。

さらに、当初予期していなかった新しい発見もあった。本研究を進める過程で、ハーディの小説において賭博行為がしばしば投資や投機といった金融行為と不可分のものとして描かれていることに目が留まり、この事実により本研究を飛躍的に発展させる可能性があることに気づいたのである。つまり、この事実は、ハーディの考える賭博者の主体性が、19 世紀ヴィクトリア朝イギリスにおける金融資本主義の浸透という歴史的な文脈と深い関連をもっている可能性を示している。近年国内外で活況を呈する金融文化史研究が明らかにしつつあるように、ヴィクトリア時代には、17 世紀末から 18 世紀初頭にかけて生じた財政革命に次いで、金融分野においてより広範囲にわたる大きな変革が生じた。法定通貨、信用証券、証券取引所、銀行、株式会社法、あるいは金融ジャーナリズムなどといった金融諸制度が互いに絡み合いながら、社会全体を覆う金融システムへと変貌を遂げていったヴィクトリア時代は、20 世紀以降の本格的な金融資本主義社会を準備した時代なのだという。重要なのは、こうした変革が進む一方で、多くの人々が投資や投機といった金融行為を、偶然の遊戯である賭博と不可分のものとして否定的に捉えて危険視していたことだ。言い換えれば、金融資本主義社会は偶然に支配された巨大な賭博場のようなものとして想像されていたのである。そうだとすれば、ハーディが小説を通じて提示しようとする、偶然の結果に責任を負う賭博者の主体というモデルには、彼なりの金融資本主義時代の倫理学という側面があると考えられるのである。

だが、社会全体の金融資本主義化が世紀を通じて進行していったことから当然推測されるように、そこに生きる誰もが賭博者になってしまうような金融資本主義社会の到来を見据えて、従来の道徳観を再考しようと試みる作家たちが、ハーディ以前にもいたはずである。だとすれば、今後取り組むべきは、ハーディに至るヴィクトリア時代の小説家たちが、社会の金融資本主義化を目の当たりにしながら、いかに責任主体をめぐる思考を展開していたのかという問題だと思う。この問いに答えることで浮かび上がってくるのは、自由意志と責任を両輪とする、18 世紀小説的な道徳主体モデルが、金融資本主義の胚胎期であるヴィクトリア時代の小説を通じて相対化されてゆき、世紀末にハーディの小説において賭博者の責任主体という代替モデルが姿を現すまでの道筋である。この道筋を描くことができれば、少なくとも以下の三つの貢献を達成しうはずだ。第一に、自由意志によって選択した行為に責任を負う主体を描くことが近代に誕生した小説ジャンルの本質的特徴の一つであるとする、伝統的小説観を更新することができるだろう。また、先に触れた「道徳的運」の概念に連なる系譜がヴィクトリア時代のイギリスにも存在することを示し、それによって倫理学分野における責任主体をめぐる議論の発展に寄与することができると思われる。最後に、金融資本主義がよりいっそう深くグローバルに浸透した結果、事前に予測することがほぼ不可能な偶発事態と隣り合わせになった我々が生きる社会において、いかに責任主体を成り立たせうるのかという現代的課題に対して、解答の手がかりを示すことができるかもしれない。こうした展望を描き出したことも含めて、以上が本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原雅樹	4. 巻 54
2. 論文標題 悲観主義とは「確実な賭けをすること」である トマス・ハーディの_A Laodicean_における金融資本主義時代の倫理学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 試論	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原雅樹
2. 発表標題 「負けない賭けをする」 トマス・ハーディの悲観主義と倫理学
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第14回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原雅樹
2. 発表標題 『熱のない人』と賭博熱
3. 学会等名 日本ハーディ協会第61回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------